

卵焼きは何色？

海猫チェリコ

たたいた梅干しを白米に混ぜ、熱い熱いと言いながら俵形に握る。これが私の母が作るピンク色の梅干しおにぎり。お弁当箱に五つも入れてもらうのは、そのうち一つを友達に蘭ちゃんにあげるため。蘭ちゃんはうちの梅干しおにぎりが大好きで、いつも蘭ちゃんちの卵焼きと交換した。蘭ちゃんちの卵焼きは、うちの醤油味の茶色いそれと違って、甘くて表面に光沢があつてタンポポみたいなお愛らしい真っ黄色をしていた。その甘みと色味が、蘭ちゃんがお母さんから受けている愛情の種類なのだと、子供ながらに思っていた。そして蘭ちゃんの玉のように艶のある歌声は、その卵焼きを食べているかではないかと密かに思っていた。

私と蘭ちゃんは、同じ合唱団に通っていた。日曜日には、お弁当を持って一日練習をした。蘭ちゃんは歌の才能に恵まれ、ソプラノのソロが必要な時は必ず抜擢された。一方の私は、三人で歌うソリが必要な時にメゾソプラノのパートで時々呼ばれた。よく素直で素朴な歌声だと言われたが、醤油味の卵焼きと言われているようで複雑な気持ちだった。

蘭ちゃんは親友だった。いつも体をくっつけてお弁当を食べ、手をつないでトイレに行き、微笑みながら同じ歌を歌った。小学生の私は二人はずっと同じ歌を歌い、同じ梅干しおにぎりを食べるのだらうと信じて疑わなかった。

ある日、指揮者が交代した。その世界で有名な彼は、歌に完璧さを求め、基礎練習にほとんどの時間を費やした。彼が求めるハーモニーは、まるで隙のない高級懐石料理店のだし巻き卵のようだった。その指揮者に蘭ちゃんは反発したのである。蘭ちゃんは、ただ楽しく歌いたかったから。まもなく中学生になるという頃、蘭ちゃんは合唱団を辞めた。

それから私はお弁当を一人で食べた。梅干しおにぎりは4つ。誰かが「一つ頂戴」と言ってくれないか期待したが、あのおにぎりが好きなのは蘭ちゃんだけ。あんなに真っ黄色の卵焼きを持つてくるのも蘭ちゃんだけ。蘭ちゃんの卵焼きは、本当に真っ黄色だった。

二年後。学校の遠足で大きな公園へ行った。私は寂しい合唱団に見切りをつけ、絶好調の学校生活を送っていた。遠足では友達と全速力で鬼ごっこをした。遊びというよりスポーツ競技のレベルである。そんな私たちを、大きな木の根っこに座りこんで睨む女子生徒の軍団がいた。不良が多いことで有名な中学校の制服を着ている。少し離れよう

とした私の耳に入ったのは、聞き覚えのある声。声の主は、不良のリーダー格と見られる生徒だった。顔を見ると、それは、蘭ちゃんだ。

「蘭ちゃん！」

私は叫びながら駆け寄った。蘭ちゃんは、私を睨んだ。学校の先生も、不良に近づくなと言う顔をした。それでも鬼ごっここの勢いのまま蘭ちゃんに駆け寄った。だって蘭ちゃんだから。

「ナツだよ！合唱団の」

その瞬間、蘭ちゃんはその頃のように笑い、私に抱きついた。しかしそれはほんの一瞬だけ。蘭ちゃんはすぐに元の表情に戻った。私は彼女の今の立場を理解して「バイバイ」と言った。「バイバイ」と返した蘭ちゃんの声は、相変わらず美しい響きを放った。彼女の右手には、真っ黒い海苔に覆われたおにぎりが握られていた。

これには後日談がある。十数年後、上京していた私は、会社の近くの公園でお弁当を食べていた。休日楽しめる何かいい演奏会はないかとスマホで探しながら。するとソプラノ歌手のリサイタルの情報が出てきた。歌手はなんと蘭ちゃん。あれから真っ直ぐ才能を伸ばしていたんだ。私は蘭ちゃんのドレスアップした写真を眺めながら、不恰好なピンク色の梅干しおにぎりと、焦げ付いた真っ黒い醤油味の卵焼きを頬張った。鳩ぽっぽたちに囲まれながら。